体系的詩学の試み

――『原詩』内篇における批評の変革――

水津有理

一

『原詩』[1]は、明末清初の文人、葉燮[2]によって一六八六年に著された詩学の専著であり、内外二篇からなり、それぞれ上下二巻に分かれる。その内容は沈珩による叙に「内篇、標宗旨也。外篇、肆博辨也。（内篇は主旨を標榜したものであり、外篇は多方面に渉る論を述べたものである。）」と記されるように、内篇は詩の歴史的変遷のメカニズム、詩法の概念とその運用を論じた総論であり、外篇は歴代の詩評、詩人および詩篇に対する具体的論評となっている。明代の古文辞派の余波と、清初の宋元詩流行という新たな流れが交錯する当時の詩壇を背景に、中国詩がいまや衰退の危機にあるという意識のもとに書かれ、衰退からの再生あるいは「詩の道」の永続性の回復をめざすことが執筆の動機となっている。

『原詩』の特性の一つがその「体系性」にあることは、すでに多くの論者の指摘するところである。例えば呂智敏は、「『原詩』的詩論、美論與方法論[3]」のなかで「『原詩』は理論性、系統性の非常に強い詩論、美学理論の専著であり、中国の伝統的な評点漫談式の詩話、詞話と比較すると、方法論のうえで極めて顕著な差異を有している。」

と述べている。この指摘からもわかるように、『原詩』があえて「体系的」と評される背景には、詩話に代表される伝統的な詩評との形態の差異が意識されていると言えるだろう。『四庫提要』はまさにこの点を突いて、

雖極縱横博辨之致、是作論之體、非評詩之體也。

縱横に博弁の限りを極めるとはいえ、これは議論の体であって、詩を評する体ではない。

と断じ、詩学の書としての『原詩』の特異さを指摘したうえで、全体としては否定的な評価を下している。しかし、まさしくこの伝統的な詩評の形態との差異こそが、葉燮の意図するところであった。外篇（上）において彼は次のように言う。

詩道之不能長振也、由於古今之詩評雜而無章、紛而不一。（外篇・上　一二）

詩の道が永続的な力を振るえないのは、歴代の詩評が雑然として筋道がなく、紛然として統一性を欠くからである。

S. Owen は『Readings In Chinese Literary Thought』[4]のなかでこの一節をとりあげ、次のように論評している。

伝統的な中国の文学思想の文脈のなかで、これは甚だ驚くべき主張である。中国における批評家たちはしばしば、規範を提示し、特定の基準からの評価を下すことによって時代の芸術を先導し、過去の栄光を回復することを望んでおり、多くの論者が「誤った概念によって詩を間違った方向へ導いた」として論敵を非難しているが、誰一人先人たちの概念的な系統性の欠如に責任の所在をおいたものは無かった。しかし、葉燮にとってはこれこそがまさに問題の核心であった。その問題に対する解答が、芸術の基本的な原理に関する包括的かつ統一性のある解説であり、解説の形式までもが、恣意的な評価がもたらす過ちや偏向からの自由を保証されていなければならなかった。

葉燮は、創作に及ぼす批評の役割に自覚的であり、かつ批評が詩の危機的状態に対して有効性を発揮できないのは、批評がその長い歴史全般にわたって体系性と統一性を欠いてきたからだと認識していた。Owen の見解に従うならば、葉燮にとってそれは、批評の概念的な過ち以上に重大な問題だったということになる。『原詩』の体系性は、葉燮のこのような認識に基づいて、伝統的詩学の枠組みを自覚的に超えようとした試みと言える。

本稿では、内外二篇のなかでも殊に理論的体系性の強いと言われる内篇に焦点をあて、その理論の骨格を明らかにするとともに、体系的詩学への試みを支えた葉燮の批評の在り方について検討し、『原詩』の体系性が具体的にはどのようなものであり、如何なる要素によって維持されたかを考察してみたいと考える。

二

内篇（上）において葉燮はまず、「正」「変」というキーワードを用いて、中国詩の歴史全般の盛衰の変遷を、一つの連続性のある動態として捉えようと試みている。それは次のようなものである。

歴考漢魏以來之詩、循其源流升降、不得謂正爲源而長盛、變爲流而始衰。惟正有漸衰、故變能啓盛。如建安之詩、正矣、盛矣。相沿久而流於衰、後之人力大者大變、力小者小變。六朝諸詩人、間能小變、而不能獨開生面。唐初沿其卑靡浮艶之習、句櫛字比、非古非律、詩之極衰也。而陋者必曰。此詩之相沿至正也。不知實正之極弊而衰也。迨開寶諸詩人、始一大變。彼陋者亦曰。此詩之至正也。不知實因正之至衰變而至盛也。（内篇・上　三）

漢魏以来の詩を、その「源」と「流」、上昇と下降にそって一つ一つ観ていくと、「正」が「源」であってつねに盛え、「変」は「流」であって衰退の始まりであると言うことはできない。ただ「正」も次第に衰えるの

であり、それ故に「変」が「盛」を切り開くことが出来るのである。建安の詩は「正」であり「盛」である。これが長く行われて「衰」にいたると、後世の詩人で力量の大きいものが大きな変革を、力量の小さなものは小さな変革をもたらすのである。六朝の諸詩人たちは、時には小さな変革をもたらすことは出来たが、独自に新しい局面を開くことは出来なかった。唐初は六朝の「卑靡浮艶」の詩風をなぞり、一字一句に腐心し、古詩でもなければ律詩ともつかず、詩の衰亡ここに極まったのである。かの見識の浅いものは決まってこう言う。「これは詩が正にいたる過程である」と。実は「正」の弊害が積もり積もって「衰」となったのを知らないのである。開元、天宝の諸詩人にいたって一大変革が始まった。かの見識の浅いものはまた言う。「これは詩の正の極致である」と。実は「正」の衰えが極限に達したことで「変」が生じ、それによって「盛」の極致をもたらしたのだということを知らないのである。

これは葉燮による詩の歴史的変遷の分析の一部分に過ぎないが、ここで彼は、「正」を規範的なもの、すなわち完成された理想態とし、「変」を規範からの変化逸脱としている。完成され、規範化された表現は、それが長く用いられ再生産を繰り返すことによって次第に詩の表現としての力を失い衰退する。そして「正」が「変」じることによって、つまり規範を変更逸脱していくことによって衰退の局面から脱し、再び「盛」に転じる（再生する）ことが可能になる。盛唐詩の隆盛は、建安詩の「正」の衰退が極限まで達したことによって「変」が生じ、規範そのものに変更が加えられたことで再生し、中国詩がさらなる高みに達した結果であると分析されているのである。

葉燮はさらに「変」＝「因」＋「創」と規定し、必ず前時代のものに基づいて（＝「因」）、そこにさらなる創造を加えることによって（＝「創」）「変」が実現すると主張する。「変」の内部構造をこのように規定することで、「正」から「変」への遷り変わりは、二つの異なる局面の交替ではなく、連続性をもったひとまとまりの動態とし

て認識することが可能になる。葉燮は、これが詩の歴史を通貫する変遷の普遍的なメカニズムであるとしたのである。

ここで一つ問題となるのは「正」「変」というキーワードの概念規定であろう。中国詩の変遷をめぐる記述において「正」「変」といえばただちに思い出されるのが『詩経』大序にみえる、「変風」「変雅」に関する言及である。

至于王道衰、禮儀廢、政教失、國異政、家殊俗、而變風變雅作矣。

王道が衰え、礼儀が廃れ、政教が失するに至って、諸国それぞれが勝手な政治を行い、家々の風俗もばらばらになり、そうして「変風」「変雅」が作られた。[5]

この記述にもとづいて理解される「正」「変」は、政治や社会の状況が詩に反映するという意味合いで用いられるものであり、ことに「変」には衰退の反映という属性が付与される。さらに十六世紀以降、厳羽の『滄浪詩話』、高棅の『唐詩品彙』にみえる詩観を引き継いで盛唐詩を「正」とし、それ以降の詩を「変」として退けた古文辞派を中心に、「変」ははっきりと否定的評価をもった用語として用いられることになる。そこで葉燮は、詩史の具体的分析に先立って、キーワードたる「正」「変」の概念規定を次のように行っている。

且夫風雅之有正有變、其正變係乎時、謂政治、風俗之由得而失、由隆而污。此以時言詩。時有變而詩因之。時變而失正、詩變而仍不失其正、故有盛無衰、詩之源也。吾言後代之詩、有正有變、其正變係乎詩、爲體格、聲調、命意、措辭、新故升降之不同。此以詩言時。詩遞變而時隨之。故有漢、魏、六朝、唐、宋、元、明之互爲盛衰、惟變以救正之衰、故遞衰遞盛、詩之流也。（内篇・上　三）

そもそも『詩経』には「正」と「変」があり、その「正」「変」は時代と係わりがある。つまり政治や風俗が「得」から「失」へ、「隆」から「汚」へと変化したことと係わりがあるのである。これは時をもって詩を語っ

ているのであり、時に「変」あるとき、詩もこれによって変化するのである。時は変じて「正」を失ったが、詩は変じてもその「正」を失わず、故に「盛」のみがあって「衰」がない。だから『詩経』は「詩の源」なのである。私は後世の詩には「正」と「変」があると言ったが、その「正」「変」は詩に係わるもの、つまりその「体格」「声調」「命意」「措辞」、詩の新旧、発展と衰退のさまざまに係わることである。ここでは詩をもって時代を言っているのであり、詩がこもごも変化すれば時もこれに随うのである。ゆえに、漢にも魏にも六朝、唐、宋、元、明にもそれぞれ「盛」と「衰」があり、ただ変ずることだけが「正」の衰えを救う、このように盛衰を繰り返すのが「詩の流」なのである。

ここでは詩の歴史全体が「詩の源」「詩の流」の二つの部分に分けられており、「正」「変」の意味合いが部分によって違うということが述べられている。つまり『詩経』における「正」「変」は時代――すなわち政治や社会の「正」「変」を反映するものだが、後世の「正」「変」は、時代とは関係なく、「体格」「声調」「命意」「措辞」など詩そのものの言語表現にかかわる「正」「変」であるというのである。「詩がこもごも変化すれば時もそれに随う」という場合の「時」は、文学的な「時」、詩自体の変化によって移る時代であると考えることができる。[6] 葉燮が理論化の対象としているのは主として盛衰を繰り返す「詩の流」すなわち『詩経』以後の詩の変遷についてである。

これらの記述から、詩を批評するにあたっての葉燮の姿勢について、次のようなことが読み取れる。

①葉燮は、詩の歴史的変遷を外在的なもの（政治や社会）との係わりにおいて捉えるのではなく、詩そのもの――具体的には「体格」「声調」「命意」「措辞」など詩の表現そのもの――に係わる自律的なメカニズムとして捉え、その盛衰の内在的な規律を「正」「変」という概念によって抽象化しようと試みている。

②「正」「変」というキーワードの意味合いをめぐって『詩経』大序の歴史的記述とのあいだに矛盾を来さない

よう、詩史全体を「詩の源」と「詩の流」に分け、この二つの部分における「正」「変」の意味合いは必然的に異なることを明確にしたことは、彼が体系性のある理論を立てただけでなく、その理論を維持するための一貫性の確保に十分な注意を払っていることを示している。

この二点である。

葉燮は「正」「変」というキーワードを用いることによって、詩の歴史的変遷を詩そのものの自律的なメカニズムとして提示した。その理論の核となっているのは「正」よりもむしろ「変」である。彼はまた、『文選』序に現われる「踵事増華」（事を踵いで華を増す）[7]ということばを引用して、他のあらゆる事物と同じように、詩もまた時間の進行とともに「華を増して」行くのだとする。「変」ずることは歴史の必然であり、「変」ずることこそが「正」の衰えを救い、詩の道の永続性を保証するとしているのである。

三

次に内篇（下）において葉燮は、詩作における「法」の概念と、その「法」をよく運用して詩を作るために詩人に求められる資質について論じている。そのうち、『原詩』の理論的な体系性を形作る上でもっとも重要と思われるのが、「詩法」をめぐる見解である。

葉燮はここでもまず、「法」そのものの概念規定を明確にしようと試みる。彼は、いわゆる「法」と呼ばれるものには二つの種類があると述べる。一つは「定位」、もう一つは「虚名」である。「定位」とは国家の法律のごとく、一切の事象から独立して存在する固定した枠組みとしての「法」であり、「虚名」とは事象そのものに内在して事象を生み出し、在らしめている原理としての「法」である。前者の「法」は、外から事象を規制する性質を

もつために「定位」（位置を定める）と呼ばれ、後者の「法」は、つねに事象に内在して存在するために働きはあっても固定した実体はなく、ために「虚名」（名を虚しくするもの、名の無いもの）と呼ばれる。

こうした「法」という概念の二つの在り方を提示した上で、葉燮は、詩における「法」とは次のようなものであると述べている。

自開闢以來。天地之大、古今之變、萬彙之賾、日星河嶽、賦物象形、兵刑禮樂、飲食男女、於以發爲文章、形爲詩賦、其道萬千。余得以三語蔽之、曰理、曰事、曰情、不出乎此而已。然則、詩文一道、豈有定法哉！先揆乎其理。揆之於理而不謬、則理得。次徵諸事。徵之於事而不悖、則事得。終絜諸情。絜之於情而可通、則情得。三者得而不可易、則自然之法立。故法者、當乎理、確乎事、酌乎情、爲三者之平準、而無所自爲法也。故謂之曰『虚名』。（内篇・下　三）

天地開闢以来、天地の大きさ、古今の変、もろもろの事柄の内なる道理、日と星のめぐり、山河のすがた、物を賦したり、形を象ったりすること、兵、刑、礼、楽、人の欲望などが、心から発して文章となり、形をとって詩賦となる方法は幾千万とあった。私が三つの言葉でこれを概括するならば、それは「理」であり「事」であり「情」であり、これに尽きるのである。そうだとすれば、詩文の領域にどうして定まった法などがありえようか。まず始めに「理」に照らしてみる。「理」に照らして誤りがないならば即ち「理」は得られたことになる。次に「事」のなかにこれを引証してみる。「事」と引き比べてそれに悖ることがないならば即ち「事」は得られたことになる。最後に「情」をはかってみる。「情」をはかってそれが滞りなく通じるならば、即ち「情」が得られたことになる。この三つが得られてしかも揺るぎ無いとき、自然の法が成立するのである。故に「法」というものは「理」に適合し、「事」に符合し、「情」を酌み、その三者が平衡をなし、しかも自ら

「法」となるところのないものなのである。ゆえにこれを「虚名」というのである。

つまり葉燮の考える「詩法」とは、各々の表現の外に在って表現に一定の型を与えるものではなく、詩そのものに内在して千変万化の表現を生み出す原理なのだと言えるだろう。そしてその原理の内部構造をさらに詳しく述べたのが、「理」「事」「情」という三つの要素であり、この三者が一つに働きあって焦点が結ばれたある一点に、あらゆる表現を生み出しうる「自然の法」が成立し、詩がその形を得て現われるとしたのである。

詩を生み出す原理としての「詩法」が、「理」「事」「情」の三者からなるということは、詩そのものの構成要素がこの「理」「事」「情」の三者であるというに等しい。葉燮はさらにこの議論を一歩進めて、詩における「理」とは「不可言之理」（言葉にすることのできない「理」）であり、「事」もまた「不可述之事」（述べることのできない「事」）でなくてはならないとする。そして、詩において表現されるべき「理」とは、「事」とは、「情」とは、果たしてどのようなものかということを次のように述べている。

要之作詩者、實寫理事情、可以言言、可以解解、即爲俗儒之作。惟不可名言之理、不可施見之事、不可徑達之情、則幽渺以爲理、想象以爲事、惝恍以爲情、方爲理至事至情至之語。（内篇・下　五）

つまり詩を作るものは、実景に即して「理」「事」「情」を書くだけならば、既成のことばで詩を書くことができるし、その詩は常識的理解で理解することができる。しかしそれはすなわち俗儒の作である。ただ言葉にできない「理」、はっきりと目には見えない「事」、容易に伝達することの出来ない「情」、すなわち奥深く微妙なものを「理」とし、心に結ばれた象を「事」とし、複雑微妙で混沌としたものを「情」とするときのみ、「理」が極まり、「事」が極まり、「情」が極まった語を生み出すことができるのである。

ここでは、既成のことばでは表現できない「理」、単に視覚を通してだけでは見ることのできない「事」、そし

てさまざまな要素が複雑混沌と絡みあう「情」。そうしたものこそ詩人の関わるべき「理」であり「事」であり「情」であるとされているのである。詩における「理」「事」「情」がこのように規定されているということはつまり、詩の表現は既成の表現のなかに留まり続けることはできないことを示すものである。つまり、詩を生み出す原理は、その本質的特徴として、既成の言葉、完成された表現――すなわち「正」なるものを「変」じて行くという志向性をもつことになるのである。ここにおいて、詩における「法」とは何かという議論は、内篇（上）に構想された詩の歴史的変遷のメカニズムと結びついて一つの完全な円を形作ることになる。『原詩』内篇の理論的な体系性はこうして完成されるのである。

四

ここまで、詩の歴史的変遷のメカニズムと詩法についての記述を中心に、『原詩』内篇の理論的な枠組みを概観してきた。この項ではさらに、こうした理論的な枠組みの一貫性を支える葉燮の批評の在り方について考えてみたいと思う。以下に、葉燮が詩の批評における自らの立場を表明していると思われる二つの部分を引用する。どちらも内篇（上）における記述である。

或曰。『「温柔敦厚、詩教也」。漢、魏去古未遠、此意猶存、後此者不及也。』不知『温柔敦厚』、其意也、所以爲體也、措之於用、則不同。辭者、其文也、所以爲用也、返之於體、則不異。漢魏之辭、有漢魏之『温柔敦厚』、唐、宋、元之辭、有唐、宋、元之『温柔敦厚』。（中略）『温柔敦厚』之旨、亦在作者神而明之。

（内篇・上　三）

ある人は言う。『「温柔敦厚、これが詩の教えである。」漢魏は古えからまだ遠くない時代であるからこの意義

が保たれていたが、漢魏以後の詩は及ばない。』（このように言うのは）「温柔敦厚」がその意であり、つまりその「体」（本質）なのであり、これを「用」（現象）として使えば様々に違って現われるということ、ことばとは詩の文もようであり、つまり「用」として機能するものであり、（様々に現われる）「用」を「体」に立ち返らせれば一つのものになるということを知らないのである。漢魏の「辞」には漢魏の「温柔敦厚」があり、唐、宋、元の「辞」には唐、宋、元の「温柔敦厚」がある。（中略）「温柔敦厚」が如何なるものかということは、詩を作る作者が自分自身の直観の働きによって明らかにするべきものなのである。

「温柔敦厚、詩教也。」とは、『礼記』経解にみえる言葉である。ここにいう「詩」とは『詩経』のことであり、伝統的な儒家的詩観のなかで、『詩経』は「温柔敦厚」（おだやかな、やさしい、誠実な、慎み深い）を体現したものであり、その詩は人の性情を「温柔敦厚」なものに陶冶する教化作用をもつと考えられてきた。後世の詩論詩評においては「温柔敦厚」という言葉は、ある詩の表現する内容（詩教思想に合致しているか否か）と表現そのものの特定の風貌（含蓄、言葉の穏やかさ、自然さなど）の二つの方面の意味をもつ。ここで葉燮は、漢魏の詩がその「温柔敦厚」ゆえに後世の詩よりも優れているとする「或る人」の姿勢を批判している。「温柔敦厚」の価値はあくまでも詩の内側にあるものであって、詩の表現の変化や多様性を拘束するものではないし、ましてやこれを詩の外側において、異なる時代、異なる作者の詩を評価づける固定した規格とすることはできないと主張しているのである。

詩にあらかじめ決められた特定の価値や外在的な規格を当てはめて批評すべきではないとする主張は、次の部分にさらに鮮明に現われている。

苟於情、於事、於景、於理隨在有得、而不戾乎風人『永言』之旨、則就其詩論工拙可耳、何得以一定之程格

之、而抗言風雅哉？（内篇・上　三）

もしも（ある詩が）その「情」において「事」において「景」において「理」において、その場に応じて得るところがあり、かつ詩経の詩人の言うところの「永言」（声を長くして朗唱する）の主旨に反することがないならば、それぞれの詩に即して巧拙を論ずればそれでよいのである。どうして一つの枠を当てはめて、これこそが詩の正統だと主張することができようか？

ここでは詩が詩としてしかるべき最も基本的な要件を満たしていたならば、その後は個々の詩に即して内在的に評価すべきものであって、外在的な規準たる「一定之程」を押し付けるべきではないと述べられている。

『原詩』成立の背景となった明代の古文辞派の詩論は、

①漢魏盛唐詩を排他的に評価して盛唐詩を規範化

②詩の由来は「妙悟」にありとする厳羽の詩説を拡大発展

③詩の芸術性、審美性を重視

という特色をもっていた。

これに対して銭謙益ら清初の学者たちの主張には

①宋元詩を称揚

②詩は学問的教養に基づくべきであると主張

③詩の現実社会における効用を重視。詩教思想へ回帰。

という傾向がみられる。

これらの主張は全く逆のものにみえるが、どちらも「詩とは～であるべき」という外在的な規準に従って詩に

優劣上下の評価を下し、その優とするもの上とするものを詩作における外在的規範として示そうとしたという点において類似するものと言える。これに対してあくまで詩そのものに即して批評しようとした葉燮は、詩を分析する指標として、「質文」「体製」「格律」「声調」「辞句」など詩の言語的側面に着目し、その結果、ある程度客観的で一貫性のある視点を保つことが出来たのではないだろうか。

五

本稿では、『原詩』のもつ体系性という特徴に注目し、内篇二巻にわたる理論的体系性の骨格と、批評の在り方に対して葉燮が言及したと思われる若干の記述を分析検討した。

『原詩』内篇の体系性を支えているものは、絶えず変化する現象、無限のパターンをもつ表現の内部にあって、その現象や表現を生み出している普遍的な「原理」への強い関心である。そしてそうした普遍的な「原理」を提出することができたのは、詩を「詩とは〜であるべきである。」とする恣意的な特定の規準から序列づけするのではなく、それぞれの詩について詩そのものを内在的に批評するという立場をとったことによって可能になったものである。

内篇の（上）と（下）では、前者が詩の歴史的変遷のメカニズム、後者が詩作における「法」の実体とその「法」の運用に関わる詩人の内的要件（つまり個々の詩の成立にかかわるメカニズム）という二つのものを論じている。しかし、実のところ著者は、この二つのメカニズム双方を通じて、高度に抽象化した詩の統一原理ともいうべきものに到達しようとしているのである。それは詩の言語表現の無限のパターンを包括するだけでなく、過去から未来に向って永続的に働き続けるものでなくてはならなかった。詩の原理が、単に個別の詩の創作という静的な

視点からのみ論じられているのではなく、そこに「詩」という表現形態の永続性という動的な視点が導入され、原理を構成する重要な一部として認識され構想されている点は、大変興味深いものに思える。

またもう一つ挙げておきたいのは、葉燮が理論形成の過程で、自らの理論のキーワードとなる言葉の概念規定を行い、論述の一貫性を維持するという姿勢をみせていることである。「断片的な印象批評」が主流をなす伝統的な中国の文学批評において、多くの批評家は自分たちの用いる批評語について、理論の根幹をなすキーワードに関してすらも明確に定義付けしない[8]のが常であった。しかし葉燮は、『詩経』における「正」「変」と『詩経』以後における「正」「変」の定義づけの違いを明確に論じた部分や、「詩法」の原理についての持論を展開するに先立って行われた二つの「法」についての概念規定から分かるように、用語の概念規定に注意を払っている。このことは『原詩』の理論的な体系性や論旨の一貫性を支える上で非常に重要なポイントである。

六

『原詩』内篇の理論は多くのキーワードを用いて展開され、「理」「事」「気」などをはじめ哲学用語に由来をもつものも見られる。こうした詩学への哲学概念の導入が『原詩』の詩学の大きな特徴と一つとなっている。本稿では内篇の理論についてその骨格をたどるに止まり、哲学用語から借用されたキーワードの由来や、解釈、定義づけについては未検討のままである。また外篇で展開されている具体的な批評が、内篇で構築された理論をどのように反映しているかについても今後詳細な検討が必要になると思われる。批評という行為の在り方を著者がどのように認識しているかについては、外篇と対照することでより明確になって行くだろう。これらを含め、内篇のより詳細な検討については今後の課題として行きたい。

注

（1）本論文のテキストは霍松林校注本『原詩・一瓢詩話・説詩晬語』（人民文学出版社　1979　北京）による。

（2）葉燮（一六二七―一七〇三）は、字を星期、号を己畦という。呉江（いまの江蘇省蘇州）の人である。康熙九年（一六七〇）の進士。晩年呉県の横山に寓居し、横山先生と称された。『原詩』四巻のほかに『己畦文集』二十二巻、『詩集』十巻、『残餘』一巻などの著作がある。康熙十四年（1675）知県として揚州宝応県に赴くが、翌十五年には上官の不興を買い罷免されている。その後、泰山、嵩山、黄山、匡廬、羅浮、天台、雁蕩などの名山、名勝を遊歴したのち故郷に帰り、著述と講学を生業として過ごした。七十六歳のとき、三月の予定で会稽（浙江省紹興）に遊山に出かけ、帰宅後に病を得、一年後に死去する。

葉燮の著作としては内閣文庫に『己畦文集』二十二巻、『詩集』十巻、『残餘』一巻（康熙二十五年の序をもつ刊本）が収蔵される。

（3）『社会科学』1987第3期所収。呂智敏にはほかに『詩源・詩美・詩法探幽――『原詩』評釈』（書目文献出版社　1990北京）がある。

（4）Stephen Owen : Readings In Chinese Literary Thought, Chaper11, The Origins of Poetry, Council on East Asian Stadies, Harverd 1992.

引用部分の原文は次の通り。

In the context of traditional Chinese literary theory, this is a most startling proposition. Critics had often hoped to guide the art and to restore it to former glories by precepts and particular judgments ; many had accused their opponents of leading poetry astray by wrong-headed notions;but no one had placed the blame on his predecessor's conceptual disorganization. For Yeh Hsieh, this is indeed the heart of the problem ; its solution, a comprehensive and unified exposition of the basic principles of the art, an exposition whose very form will guarantee freedom from the error and one-sidedness that follow from ad hoc judgements. (pp. 493–494)

（5）訳文については岡村繁『毛詩正義訳注』（中国書店　1986　福岡）を参照させていただいた。

（6）Owen は前掲の著作の中で Part of the difficulty here is due to the fact that Yeh Hsieh has shifted the meaning of "the times" from cultural and political history to literary history.（p. 553）と述べ、ここで葉燮が、政治的文化的意味での「時」から、文学的歴史の「時」への置換えを行っていると分析している。文脈から判断してこの解釈は妥当であると思われ、本論文ではこれを採用した。しかし「詩遞變而時隨之」（詩がこもごも変化すれば時もこれに随う）における「時」をさらに検討すると、もう一つの解釈が成り立ちうる。すなわち「詩そのものが現実の社会的政治的歴史を先導する」という解釈である。この問題は、葉燮の詩に対する考え、ひいては中国詩の本質的特徴に関する考察に関わるものであり、葉燮の他の著作とも合わせて今後さらなる検討が必要と思われる。

（7）《文選》序「踵事増華」と関連するのは以下の箇所である。「若夫椎輪爲大輅之始、大輅寧有椎輪之質？增冰爲積水所成、積水曾微增冰之凛、何哉？蓋踵其事而增其華、變其本而加厲、物既有之、文亦宜然。」

（8）劉若愚著、佐藤保訳『新しい漢詩鑑賞法』（大修館書店　1972　東京）第二章「中国の伝統的詩観」を参照。原書は英文でタイトルは The Art of Chinese Poetry（又は『中国詩学』）。杜国清氏の翻訳による中文版もある。

〈その他参考文献〉

青木正児『清代文学批評史』（岩波書店　1950　青木正児全集1　春秋社　1969　に収録。）
郭紹虞『中国文学批評史』（新文芸出版社　1955　上海）